

# 地域の若者と国有林を結ぶ取組

米代東部森林管理署上小阿仁支署 三里森林事務所 森林官 佐々木 嵩史

## 1. はじめに

平成 25 年度の国有林野事業一般会計化を控え、より一層「国民の森林」としての取組が求められる中、国有林が地域社会とどのように向き合っていくかが問われている。当支署の位置する秋田県上小阿仁村は、人口約 2700 人、その約半数が 65 歳以上と高齢化の進んだ地域である。村の面積の約 7 割を国有林が占め、かつて多くの村民が営林署作業員として従事した「国有林の村」であったが、現在では地域社会との関係は希薄になっており、とりわけ若年層でその傾向が顕著である。そこで地域の若者を対象に、国有林を身近に感じてもらうことを目的とした森林ふれあい活動を行ったので、その取組を紹介する。

## 2. 取組の経緯

村内には、地域活性化を目的として設立された任意団体「上小阿仁若者会議」（以下若者会議）が、特産品開発や伝統芸能の保存活動等を行っている。この若者会議は、秋田県の委託を受けた NPO の支援のもと平成 22 年に設立された団体で、村内に住む 20 ～ 30 代の若者や中学生、都会から派遣されている地域おこし協力隊等を中心に十数名ほどで構成されている。

若者会議主催のイベント案内を見てその存在を知った私は、そこに参加して、国有林や支署に対し彼らがどのようなイメージを持っているかを把握することにした。するとメンバーから返ってきたのは「国有林なんて知らないのでは」といったネガティブな反応だった。一方で、「国有林を開発してレジャー施設をつくってはどうか」という国有林の利活用に関する意見も聞かれた。このことから、彼らは国有林に対してネガティブな印象を持ちつつも、全く関心が無いわけではないと考えた。このため、正しい情報提供とふれあい体験を通じて森林や林業、国有林を身近に感じてもらう機会をつくり、彼らに知識や認識を深めてもらうことが必要と考え、若者会議と連携した森林ふれあい活動を提案し、実施することとなった。

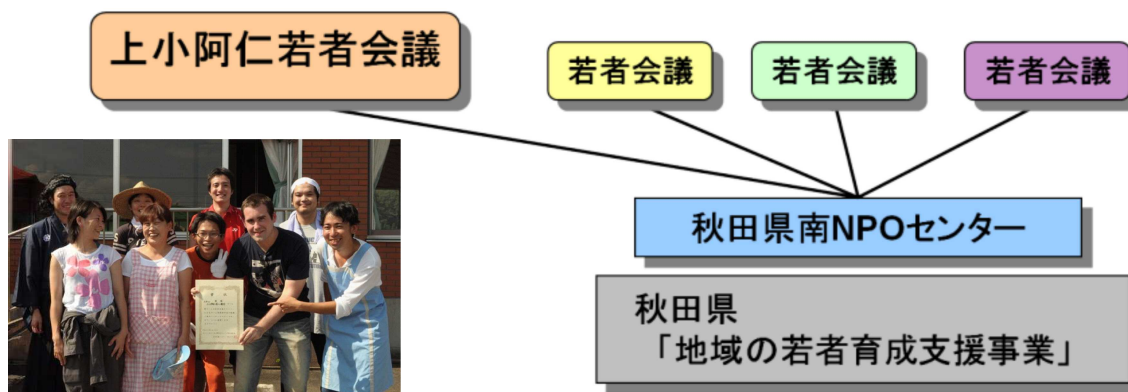


図 1：若者会議の概要

### 3. 取組の方法

取組にあたっては、以下の2点を意識して行った。

#### (1) 活動への積極的な参加

若者会議が目指す方向性と森林ふれあい活動の内容を合致させるために、若者会議の活動へ積極的に参加し情報交換を行うことで、ニーズの把握を行った。

#### (2) ワークショップ形式の活用

国有林という対象は若者にとって馴染みがなく親しみにくいと考えられることから、共同作業や対話を重視したワークショップ形式を取り入れることにより、参加意識の向上を図った。その際、参加者の意識レベルが段階的に向上するように、認識→知識→関心・動機→行動の流れに沿った活動を意識して行った。実施にあたっては、若者会議の運営スタッフ及び若者会議の支援を行う秋田県南 NPO センターの担当者らと事前に打ち合わせを行うなど連携して取り組んだ。

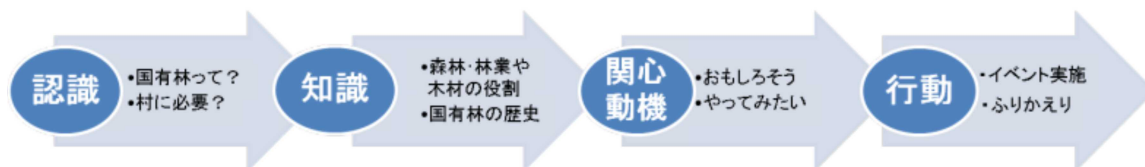


図2：ワークショップ実施の流れ

### 4. 取組の内容

平成24年5月以降、計7回のワークショップを実施した。

#### (1) 座学ワークショップ

##### ① 第1回（認識）

国有林に対する認識を共有するため、国有林に対して知っていること及び知りたことを紙に書きだし、互いに発表し合った。知っていることとして「国が管理している」や「昔は営林署と呼ばれていた」といった事項が出された。一方、知りたこととして「勝手に入ってもよいのか」や「スギしか植えてないのか」といった疑問が出された。両者を比べると、知っていることに比べ知りたことのほうが比較的多かった。



写真1：ワークショップの様子

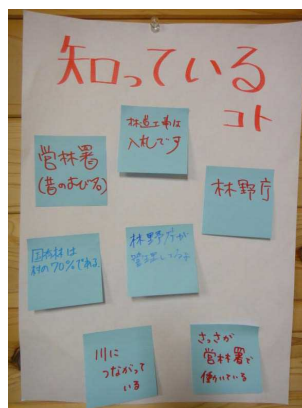


写真2：国有林について知っていること



写真3：国有林について知りたいこと、疑問

## ② 第2回（知識）

第1回で出された疑問を踏まえ、森林・林業や木材の役割、国有林の歴史等について座学を行った。実施にあたっては参加意識を高めるために、村内の国有林だと思ふ範囲を地図に色塗りしてもらったクイズを出すなどして、一方的な講義形式にならないよう工夫した。



写真4：クイズ形式の座学

## ③ 第3回（関心・動機）

新たに感じた疑問及び今後森や木を使ってやってみたいことを紙に書き出し、互いに発表し合った。参加者からは「国有林は僕たち国民のものではないんですか」や「石油ではなく薪を使えば村の経済がよくなるのでは」といった疑問が出され、第1回と比べてその内容がより深く具体的になっていると感じられた。

また、今後やってみたいこととして、「森林を探検したい」や、「木工品をつくりたい」「木を燃やしてみたい」といった意見が出され、参加者の関心や動機の高まりが感じられた。

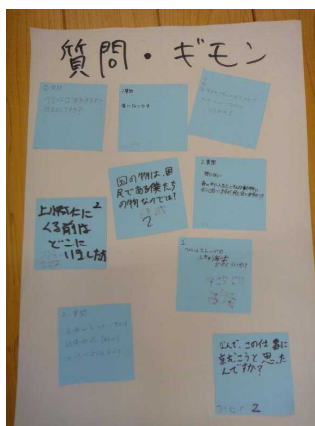


写真5：新たに感じた  
疑問・質問

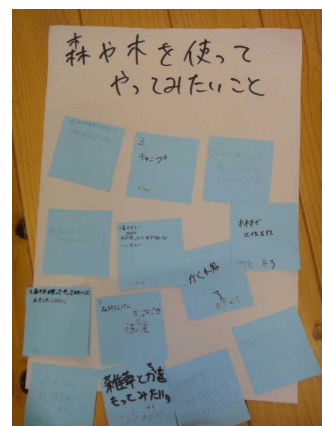


写真6：森や木を使って  
やってみたいこと

## (2) 野外ワークショップ（行動）

第3回で出された意見を踏まえ、野外イベントを企画・実施した。

### ① 第1部 国有林内の水源地散策

「森林を探検したい」という要望が出たことを踏まえ、国有林内にある集落の水道施設を散策するプログラムを企画・実施した。当日は、水道施設を管理する集落の自治会長、支署職員2名の案内により、水源地を目指した。参加者は水源地に流れる沢水をフキの葉で掬って飲んでみるなどして、普段自宅で飲んでいる水道水が国有林に蓄えられた水であることを実感できるイベントとなった。



写真7：自治会長さんの案内で出発

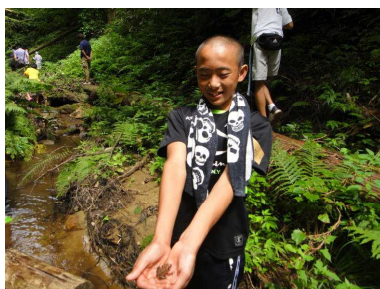


写真8：生き物を発見



写真9：フキの葉で湧水を飲んでみる

## ② 第2部 ロケットストーブ製作体験

「木を燃やしてみたい」という要望が出たことを踏まえ、一斗缶を使ってロケットストーブを製作し、実際に山から拾ってきた枝葉を燃やして料理をするプログラムを企画・実施した。火おこし初体験の中学生も多く、真剣な表情でストーブに枝をくべる姿がみられた。最後は、木を燃やしたエネルギーでそうめんを茹でて流しそうめんを楽しみ、木質エネルギーを身近に感じられるイベントとなった。



写真 10：製作する様子



写真 11：火おこし体験



写真 12：流しそうめん

## (3) ふりかえりワークショップ

一連の活動をふりかえり、感想や意見、反省点等を発表し合うワークショップを開催した。参加者からは「自分の集落にも学校林があるんだ」や「山は油断すると危ないと思った」といった新たな気づきがあったとの意見が出された。また、「今まで関わりのなかった支署と協力できてよかった」という地域内での連携を評価する意見や「もっと森林や国有林を知りたくなった」という意欲的な意見も出された。



写真 13：ふりかえりワークショップの様子

### 地域内の連携

「支署や自治会と協力できてよかった」

### 新たな認識・知識

「自分の集落にも学校林があるんだ」  
「山は油断すると危ない」  
「学校の授業にはないことが学べた」

### 関心の高まり

「もっと森林や国有林を知りたくなった」  
「また緑とふれあうイベントをやりたい」

写真 14：ふりかえりワークショップのまとめ

## 5. 成果と課題

### (1) 成果

#### ① 知識・関心の向上

当初は「国有林はいらない」と発言していた中学生の参加者らも、森林官の装備品に興味を示したり山で見つけた生き物に驚いたり、森林や木材にふれあうワークショップを楽しみながら体験していく中で、知識や関心が次第に高まっていったと思われる。また、活動を振り返る中で、「もっと知りたくなった」「またやってみたい」との意見が出てきたことから、今後の活動継続に向けた動機に繋がったのではないかと考えられる。

#### ② 新たな繋がり形成

若者会議という地域コミュニティの活動へ積極的に参加し、イベント等を協力して実施したことにより、支署と地域住民との新たな繋がりが形成されたことも今回の取組の成果の一つといえる。また若者会議に対する支署内の認知度が高まり、今後の活動継続に向けて協力しやすい環境形成にも繋がったと考える。

### (2) 課題

若者会議及び当支署の双方にとって初めてとなった今回の取組では、一定の成果がみられたものの、より国有林に対する知識や関心を具体的なものに深化させていくためには一度限りの取組では不十分であり、今後も継続的に活動を行っていくことが重要である。しかし、担当者の異動や自主的に参加する若者の減少等活動を取り巻く状況の変化が起こりうる中で、属人的な取組から徐々に脱皮していくことが課題であり、そのための仕組みづくりが求められる。具体的には、活動を若い世代を対象とした総合的な学びの機会として位置づけ、小中学校や役場といった地域の主体と連携していくことも一つの方法であると考え。これらを念頭に置きつつ、今後の方向性について関係者間で検討していく必要がある。

## 6. 考察

国有林野事業の一般会計化に伴い、「国民の森林」として地域といかに向き合っていくかが一層重要な課題となる一方で、地域の側においても固有の資源や伝統文化のよさを見直し、地域おこしに繋げようとする動きが各地で広がっている。そうした中で、今回のように地域活性化に取り組む団体と国有林が協働し、彼らを当事者として巻き込んでいくことで、地域にとってより身近な国有林へと近づけることができるのではないだろうか。今回意識的に行った「地域コミュニティへの積極的な参加」と「参加型の森林ふれあい活動」は、そうした取り組みを進める上で効果的な手法であると思われる。前者については、普段から地域に目を向け、行事等に積極的に参加する姿勢が大切であり、それを組織的に支える体制づくりが求められる。また後者については、技術と経験が多分に求められる手法であり、今回私自身もワークショップ実施にあたって NPO スタッフのサポートが大きな支えになったと感じている。森や木に関する学びの機運が高まる中、環境教育分野の研修制度充実や、NPO や大学等の教育研究機関との連携等を通して国有林職員のスキルアップを図る必要があると考える。